

# 記述完成

## II

はじめに――

本書は、小学生の記述力、ひいては国語力を伸ばすために書かれたものです。

記述力をつけるためには、書く「こつ」を習得し、トレーニングを重ねることが必要です。「芸術は模倣から始まる」という言葉があるように、正しく美しい日本語を書くためには、お手本となる文（文章）を筆写することから始め、文を作る上でのさまざまなきまりを学びつつ、自分なりの文を書いていく訓練をしていかなければなりません。

本書では、トレーニングAで、日本語の文を構築するための基礎訓練を行い、トレーニングBで、読解をまじえながら自らが文を作り、書く訓練を行います。トレーニングBでは、すぐれた作家の名文を数多くおせしており、そうした文章にふれることも、記述の上達につながりますので、じっくりと読みこんでから問題にあたってください。

何事も積み重ねが大切です。一步一步、着実に訓練を重ねていきましよう。

# 第1課

(学習日 月 日)

## ■ トレーニングA ■

一、次のことばを使って短文を作りなさい。

① たぶん……だろう


② もし……たら


二、次のことばを意味が通るようにならばかえて文を作りなさい。(文末に「。」をつけること。)

① 国の 会する 一堂いちどうに さまざまな 代表者が


② 大切だ 慣なれる まずは ことに ことが 書く


③ 持って ちがい 書いた 自信を 答えが くやしい


ポイント

★字数制限がある場合、句点（。）もふくめて字数内におさめるのは当然だが、最低でも指定字数の八割以上、理想は指定字数マイナス五字以内で書きたい。

例題

カンタの家で開かれた今年の七夕パーティーで、ふたりは願いを書いた短冊をちいさな笹の枝にさげた。ヨウジはカンタのわき腹をつつく。なにを書いたのか、無言できいてきたのである。カンタは短冊を返して見せた。

「新しいマウンテンバイクがほしい」

だが、カンタは自転車などはほんとうはどうでもよかった。心からの願いは、ヨウジみたいにはなく、ヨウジそのものになることだった。いくら親友でもそんなことを書いたら、気もち悪いといわれるだろうと我慢していたのだ。

（石田衣良『約束』）

（問い）カンタが短冊に本心の願いを書かなかったのはなぜですか。二十字以内で答えなさい。

（解答例）ヨウジから気もち悪いといわれるから。（十八字）

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

振り返ってみると、なわのれんのむこうには、いつのまにか紫色の夕闇がたちこめている。

「じゃ、ぼく、帰る。おじいちゃんは？」

「わしか。そうだな。わしもそろそろ帰るとしようか。あんまり油を売っていると、おたねさんにまた小言を食らうからな」

寅吉じいさんは、みこしを上げると、店の奥に声をかけて、出てきたおかみさんに勘定を払った。

「おや、妙子さんこの坊やだね？」

おかみさんは、ぼくをみるとそういった。妙子さんとい

うのは、ぼくのお母さんのことだ。それで、ぼくは帽子を脱いでおじぎをしたが、食堂にはいつて、なんにも注文しないで帰ってしまったのは悪いと思って、

「ぼく、おじいちゃんを捜してたんです。そしたら、ここにいたもんですから」

と弁解した。

「そうかい。それはよかったねえ」

おかみさんは、べつにいやな顔もしないで、うなずくと、ぼくの顔をつくづくと眺めて、

「そういえば、目のあたりが妙子さんに似てるかなあ。でも、東京育ちは色が白いで、すぐわかったよ」

といった。

（三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』）

問い——線「ぼくは帽子を脱いでおじぎをした」のは、なぜ  
 ですか。二十五字以内で答えなさい。


二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは、がっかりした。初めて会った居酒屋のおかみさんに、ひと目でぼくのがわかったのは、ぼくもやっと村の子どもの一人として認められてきた証拠だと思っていたのに、これでは逆に、自分が相変わらずよそ者だと思われている証拠にしかない。

「なあに、そのうちに坊も黒くなるさ」  
 寅吉じいさんは、ぼくの背中にのひらを当てて、そう  
 いった。

「一年もすれば、きっと村の子どもたちと見分けがつかなくなるじゃろうよ」

(三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』)

10

5

問い——線「ぼくは、がっかりした」のは、なぜですか。  
 十五字以内で答えなさい。


## 第2課

(学習日 月 日)

### ■ トレーニングA ■

一、次のことばを使って短文を作りなさい。

① まるで


② たとえ


二、次のことばを意味が通るようにならばかえて文を作りなさい。(文末に「。」をつけること。)

① ないので かんたんな すませた 時間が 食事で


② 花子は 中を まよった 森の 回った 道に 歩き


③ した 来るまで 中で おかえが ことに 店の 待つ


■ トレーニングB ■

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

じいさんといっしょに、ヒョウタン屋を出たとたん、ぼくはびっくりして、思わず立ち止まりそうになった。

まんまるで、赤くにごって、信じられないほどに大きな月が、道の行く手の、火の見櫓の横のところに、のっと出ている。

あれが月なのか？ 本物の満月なのか？ ぼくは一瞬、そう疑った。けれども、ここは学芸会の舞台ではない。自分の目がどうかしちやったんじゃないかと思ったが、そんなこともない。

ぼくは、こんなに赤くて、大きな月をみるのは初めてだった。東京の家の、ぼくの部屋の窓からみえた満月は、いつも高圧線の高い鉄塔の途中に、使い古したゴルフボールみたいに引っかかっていた。そうして、窓を開けてその月を眺めると、きつと遠くから救急車のサイレンがきこえてきたものであった。

(三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』)

5

10

15

問い —— 線「ここは学芸会の舞台ではない」という表現には、「ぼく」のどんな気持ちがいめられていますか。二十文字以内で答えなさい。


二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京の月がゴルフボールだとすれば、この村の月は、まるでよく熟した夏ミカンだと、ぼくは思った。みずみずしくて、てのひらにずっしりと重たい夏ミカンのような。じつさい、その月の重みで、箸を二本立てたような旧式の火の見櫓が、いまにも傾きそうに頼りなく見え、そのてっぺんにぶらさがっている半鐘は、たった一つだけ咲き残ったスズランの花のように、ちっぽけにみえた。そうして、ここではいくら耳を澄ましたところで、救急車のサイレンなんかきこえやしない。きこえるのは、遠い谷川の響きと、蛙の合唱だけである。

ぼくは、東京の満月しか見たことがなかったから、満月の夜に、といわれても、なにほどのことがあるかと思っ

10

5

ていたが、この月をみて、自分の考えを改めないわけには  
いかなかった。

(三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』)

問い —— 線「自分の考えを改めないわけにはいかなかった」

とありますが、どんな考えに変わったのですか。二十五字  
以内で答えなさい。
